

鳥海山麓の原風景

岐阜協立大学 森 誠一

幕末、長州の吉田松陰は、日本北部に頻繁に来航する外国船の情報収集のため、脱藩して旅に出た。松陰は「東北遊日記」（1852年）の一節で『峻嶺雪を含み 卓然として前に当るは鳥海山と為す 又川を済ること二次 皆源をこの山に発す 吹浦に宿る 行程十二里』と記した。この文は、今の山形県酒田市からさらに北方の遊佐町吹浦への移動の記載である。川を2回渡ったとあるが、この間の比較的大きい川である日光川と月光川かもしれない。このときの松陰の切羽詰まった心情は知る由もないが、この地域の辛辣な風土の地吹雪を表現している。この地には縄文文化の名残も色濃く残り、人の長い歴史が培われてきた。ここに『皆源をこの山に発す』とあるように、鳥海山麓には豊かな伏流水をもちつつ川が幾重にも走る。その流域の人々は地表に湧く潤沢な湧水を基盤にして集落を形成し、独自の歴史文化を築いて生活をしてきた。その半端ない風雪に対して、春の蠢動は山麓のいっそう豊かな生活感や郷土への思いをもたらす契機となる。また、豊穡な稲穂の刈り取りが終わり厳しい冬をむかえる前に、鳥海山を目指すように遡上するサケ群が現在もみられる。

湧水は、その源や湧出のあり方から概して2つに大別でき、土砂堆積による扇状地起源のものと火山起源のものがある。鳥海山や富士山をはじめとして日本は火山国であり、温泉が潤沢に出る地質・地層的な仕組みを持っている。いわば温泉は湧水の種類であり、したがって日本は湧水が頗る多い。また一方、日本の国土特性として山が多く、その起伏は川を多くするといえる。それゆえに、川は急峻な山麓に土砂を堆積し扇状地をつくり、その扇状地下に伏流水を形成し扇端部に豊かな湧水が湧出する。こうした湧水環境は、わが国の大きな国土特性なのである。つまり、ここで問題にする湧水環境という観点は、例えば、お茶に使用すると味がよいか歴史的な伝承があるとかいう「名水」や、また静岡県柿田川のように滔々と湧出する湧水環境ばかりでなく、河川内伏流水が湧くワンドや集落を形成する要件となった扇端泉、谷津田に滲みだす湧水なども包含する。残念ながら、伏流水の地下動態を含む湧水環境の研究というのは、ほとんど進んでいないのが実態である。しかも、これまで人間活動によって画一的な地域性を欠いた形で環境改変が進行した結果、個々の湧水状況が非常に危うい。

鳥海山麓は、火山性地層の境目から多量に湧出する湧き水と、月光川水系の扇状地伏流水が湧く湧水という、湧水成因の2型が同町内に認められる。両方の成因をもった湧泉をこの地域は持っているという意味においても、非常に興味深く豊かな湧き水をこの遊佐町は持っている。前者の典型的な湧水成因をもつ牛渡川は、鳥海山直下にあるといえる。この豊かな湧水をもつ川は小河川ながらも、現在も多くのサケ遡上量を保っている。後者の典型的な場所としては、平地部のやや山寄りから中央部にかけて、伏流水が湧き出て小集落を形成している地区が何カ所もある。人の生活も実は、当初はこうした山麓境界域に人の集落ができ、次いで河道をいじり治水事業を施し安

定した平地を維持して、流域全体に人為を広げてきた。

鳥海山の南麓は遊佐町のほとんどを占め、その山の豊かさは、水の豊かさも保証する典型性を顕現し、湧水生態系を研究する上で非常に適した場所である。その海にも湧く湧水環境の豊かさはサケに加え、トゲウオ類・カジカ類・ハゼ類などの魚類やイワガキ・アワビなど生物多様性を生み出している。

ここでは、こうした自然環境の地域特性が鳥海山麓の民俗・文化・歴史に与える関係性、同時に環境劣化にある現況の実態を紹介し、その保全を合意目標として、いかに地域づくりに反映させるかを検討する。すなわち『日常生活の中で意識した保全』の構築を現場で実践してきた、故人・鈴木康之さんと培った事例を踏まえて紹介したいと思う。大いに質疑いただければ幸いである。

森誠一：岐阜協立大学、福井県大野市「本願清水イトヨの里」

e-mail: smori@gku.ac.jp

鳥海山麓の数十年前の水田（山形県遊佐町）



環境保全の三位一体説（集合構造イメージ図）

